

公的自己意識が授業中の携帯電話における 迷惑行動に及ぼす影響

栗 林 克 匡

公的自己意識が授業中の携帯電話における迷惑行動に及ぼす影響

栗林 克 匡

- 目 次
- I. 問題
- II. 方法
- III. 結果
- IV. 考察
- 引用文献

I. 問 題

大学生にとって携帯電話は今やなくてはならないツールとなっている。渡邊・久保田・石崎・小柳(2008)は、中・高・大学生の携帯電話の使用状況について調査している。調査対象となった大学生の99.3%が携帯電話を所持していた。このうち、日常の携帯状況について「毎日持ち歩く」者は99.3%であった。携帯電話を所持することは、当たり前のことであり、手放せない必需品となっていることを示している。またこの調査では、購入時に携帯電話の公共の場での使用説明を受けた経験についても尋ねていたが、「受けない」が65.7%、「覚えていない」が25.7%であり、「受けた」の8.6%を大幅に上回っていた。このことは公共の場での使用マナーについての意識が高まらない一因となっているといえよう。携帯電話の普及に伴って、公共交通機関の中、劇場やコンサートホール、自動車運転中、会議中や授業中など様々な生活場面における携帯電話利用にかかわる迷惑やマナーのあり方は、大きな社会問題となっている。

携帯電話の使用マナーに関する意識は多様であり、同じ公共空間でも、場所によって

マナー意識に「合意のできている」ところと「合意のできていない」ところがある(三上, 2001)。使用してはいけないという合意のできている場所は、病院、コンサート会場、会議室や教室などの安全の配慮や静寂さを保つ必要のある場所だという共通点がある。迷惑にならない範囲でなら使用してもよいという合意のできている場所は、ホテルのロビーや路上など不特定多数の人々が絶えず行き交う流動性の高い場所という共通点がある。合意のできていない場所では、電車やバスの中、レストランの中、職場で勤務中などが挙げられている。これらの場所は、互いに接近した状態で長時間居合わせ、被害を回避できない場所という特徴がある。このうち列車内での携帯電話使用が“迷惑”という違和感を引き起こす1つの理由として、森(2009)は列車内という公的空間に私的コミュニケーションという私的活動を持ち込むことで、共有された場の意味を脅かす点にあると指摘している。その脅威が、携帯電話使用への反発や警戒、そして排除の要求を生み出すとしている。谷(2006, 2007, 2010)の研究では、列車内での迷惑行為を取り上げ、その1つとして携帯電話の使用を挙げている。谷(2006)は、他者の迷惑行為に対する自己の迷惑感と自己の迷惑行為に対する他者の迷惑感の推測を比較している。列車内での「携帯電話の通話」については、自分の迷惑感よりも他者の迷惑感を高く推測していた。また、「携帯電話をマナーモードにしない」については、見知らぬ他者

を想定した場合、やはり自己よりも他者の迷惑感を高く推測していたことが分かった。

さて大学生にとって「授業中」の携帯電話は使用してはいけないという合意がある程度できているはずであるが、実際はどのようなであろうか。「授業中」の携帯電話使用にかかわる迷惑行動に関する研究として次のようなものがある。Tindell & Bohlander (2012) は、大学生の授業中における携帯電話でのメールの使用に関わる実態と意識について検討している。この調査では、92%の学生が授業中に携帯電話でメール使用をしたことがあり、10%の者が少なくとも1回は試験中に使用したことを認めていた。教員に気づかれずに授業中にメールを打つことについて、「難しい」と思っている学生は5%ほどで、「簡単」「どちらでもない」「クラスによる」と思っている学生は93%で、大多数の学生はメール打ちで教員に気づかれることはないと思っているようである。また、授業中のメール打ちを容易ならしめる教員の特徴や教室環境についても尋ねている。授業中の携帯使用に関する方針（ポリシー）を持っていない教員や、教壇から動かず、受講生に背を向け黒板を向いている教員、大教室や教員との間に遮蔽物（机・柱・パソコンなど）があるような環境が挙げられていた。授業中のメール使用がもたらす問題として、「講義への集中がそがれ、成績が悪くなる点（32%）」「周囲の人の気が散ること（25%）」「着信音が迷惑（12%）」が挙げられていたが、「問題ない」も29%を占めていた。また授業中の携帯について「持ってもよいが、バイブモードにする」というルールに賛同する者が64%と多数を占めていた。また「周囲の迷惑にならないければ、授業中にメールをすることはかまわない」と思っている者は62%を占めていた。以上から、大学生は携帯のメール使用について、容易なことであり、弊害となる点はある程度理解した上で、周囲の迷惑にならない範囲で使

用してもよいのではという意識を持っていることが窺える。

またCampbell (2006) は、大学生と大学教員を対象に授業中の携帯電話使用についての意識調査を行っている。その結果、授業中の携帯電話使用に対する態度として、“携帯電話使用の制限についての方針”“着信音迷惑”“苦情の発生源”“不正行為”の4側面を見いだした。全体的には授業中の着信音は深刻な問題であると捉えられており、授業での携帯電話使用は制限する方針を設定することに賛成という態度の者が多かった。ただし、この研究では、授業中の携帯電話使用に対する態度に影響を与える要因として、年齢、性別、立場（学生か教員か）、所有の有無、使用時間、使用歴といったものを挙げているが、年齢と性別は態度に影響を与えていた。若い者ほど、着信迷惑に寛容で、使用制限方針には賛成をしておらず、また男性は女性よりも着信迷惑にやや寛容という結果も得られていた。以上より、大学での授業中の携帯電話使用に対しては全体的にはネガティブな態度が持たれているが、一部の要因はその程度を強めたり弱めたりすることが示唆されよう。

ところで授業中の携帯電話使用にまつわる迷惑行為の抑制には個人差が存在すると考えられる。本研究では、公的自己意識に着目する。Fenigstein, Scheier, & Buss (1975) は自己意識の強さの個人差を測定する尺度を開発している。公的自己意識はその概念を構成する因子の1つである。公的自己意識の高い者は、他者から見られる自分の外見や行動に注意を向け、他者の自分に対する反応に敏感である (Fenigstein, 1979)。この特徴から、公的自己意識の高い者は社会的迷惑行為を抑制すると考えられる。自己意識と社会的迷惑の関連について検討した研究として、出口 (2004) の研究がある。この研究では一般的な社会的迷惑行為についての迷惑認知と自身の行動頻度について尋ねていた。その結果、

公的自己意識の程度は、迷惑認知や行動頻度には影響は与えていないことが分かったが、公的自己意識の高い群では、迷惑認知と行動頻度の間に負の相関が見られていた。この結果は、仮説に沿わない結果といえるが、この研究の社会的迷惑場面の設定は一般的なものであり、実際に周りに他者が存在しているという特定の状況が十分には想定できなかった可能性がある。本研究では、大学生にとって馴染みのある授業場面を取り上げ、またその授業中の情景を記述することで周りに他者が存在しているというイメージを思い浮かべやすくする。

本研究では、まず授業中の携帯電話にかかわる迷惑行為として、そもそもどのようなものがあるのかについて明らかにした上で、大学生の授業中の携帯電話使用の程度と、使用に対する迷惑認知について公的自己意識を考慮しながら検討する。

仮説：公的自己意識の高い者は低い者よりも授業中の携帯電話に関わる迷惑行為を抑制するだろう。

Ⅱ. 方法

調査対象者：札幌市内にある私立大学の大学生108名（男性33名、女性75名）。平均年齢は19.72歳（SD=0.88）であった。なお、このうち103名が社会福祉学部所属の学生であった。調査は2012年7月に実施した。

質問紙の構成：

(1) 携帯電話の使用実態：所有歴、携帯の通話・メール・ゲームの使用時間と頻度、使用目的などを尋ねた。

(2) 授業中の携帯電話の迷惑行動および迷惑認知：本調査の前に、大学生45名（男性5名、女性40名）に、授業中の携帯電話使用に関して「迷惑だと思うこと」「気をつけていること」を自由記述で回答させた結果を参考に、20項目を授業中の携帯電話の迷惑行動・

認知尺度として採用した。

大学の授業中の状況を記述した文章を読み（あなたはある講義を受講しています。その教室には100名ほどの学生がいます。教室はほとんどの席が埋まっている状態です。その講義は先輩から「出席すれば楽に単位がもらえる」という話を聞き、履修した授業です。周りは他学科の人がほとんどで、あなたのことを知っている人は周りにいません。あなたは教室の後ろの方に座っており、両隣には見たことも話したこともない、違う学科の人が座っています。授業に集中している人もいれば、していない人もいます。）、そのような状況下での自分自身の迷惑行動の程度について、どの程度その行動をと思うかを「絶対しない（1）～必ずする（4）」の4段階で評定させた。また同20項目を用い、迷惑認知として、他者がこの行動を行ったとき、自分がどの程度迷惑だと感じるかということを「全く迷惑にならない（1）～非常に迷惑になる（7）」の7段階で評定させた。

(3) 公的自己意識：菅原（1984）の自意識尺度から公的自己意識に関する11項目を「全く当てはまらない（1）～非常に当てはまる（7）」の7段階で回答させた。

Ⅲ. 結果

1. 携帯電話の使用実態

今回調査した全ての参加者が携帯電話を所有していた。携帯電話のタイプの内訳は、スマートフォンが58%、従来型の携帯電話が40%、両方のタイプ持ちが2%であった（図1参照）。

携帯電話の所有期間は、平均70.39ヶ月であった。一日の平均通話回数は1.27回、通話時間は、54.39分であった。一日の平均メール送受信数は18.83回であった。一日のゲーム機能の平均使用時間は27.03分であった。普段の生活の中での携帯電話使用時間は平均

表 1 携帯電話使用状況

	平均値	標準偏差	最小値	最大値
携帯電話所有期間(ヶ月)	70.39	(27.20)	3	132
一日の携帯電話の通話時間(分)	54.39	(192.92)	0	1800
一日の携帯電話の通話回数(回)	1.27	(1.24)	0	10
一日の携帯電話のメールの送受信数	18.83	(24.26)	0	150
一日の携帯電話でゲームする時間(分)	27.03	(74.93)	0	600
普段の生活の中で携帯電話使用時間(分)	250.61	(217.85)	6	1080
授業中の携帯電話使用時間(分)	16.69	(17.29)	0	90

※ 1 コマの授業時間は90分である。

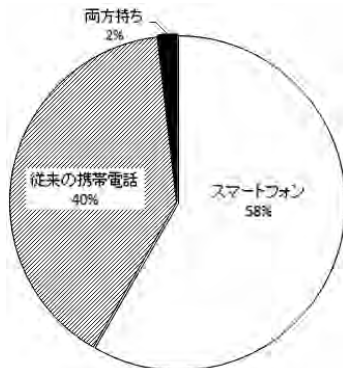


図 1 所有状況

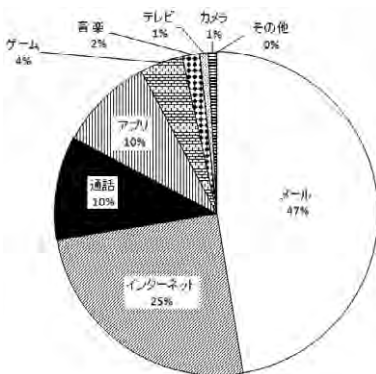


図 2 日常生活での携帯電話使用目的

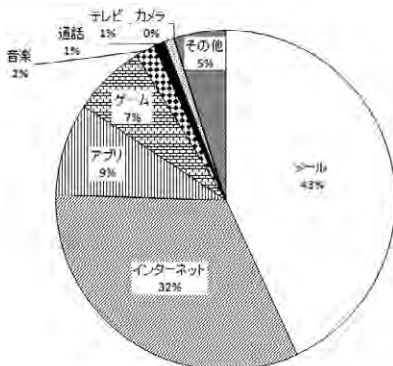


図 3 授業中の携帯電話使用目的

250.61分であった。授業中の携帯電話平均使用時間は16.69分であった。以上、携帯電話使用状況については表1にまとめた。

日常生活および授業中の携帯電話の使用目的として1位として挙げた項目の割合を図2、図3に示した。日常生活の中での携帯電話の主な使用として、「メール」を挙げる者が約半数を占めた。以下「インターネット」「通話」「アプリ」と続いている。授業中の携帯電話の使用目的については、やはり「メール」が約4割を占めたが、「インターネット」の割合も3割を越えていた。「通話」はほとんどないが、「ゲーム」の割合がやや多くなっている。

2. 授業中の迷惑行動の因子分析

迷惑行動の程度20項目について、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った結果、7因子が抽出された(表2)。第1因子は、「10. マナーモードのバイブを鳴らす」「2. この授業中はサイレントマナーモードにする(音もバイブも鳴らない状態)(逆転項目)」[11. 机の上でマナーモードのバイブを鳴らす]「1. この授業中はマナーモードにする(音は鳴らない、バイブは鳴る状態)」の4項目で、「バイブ鳴動」因子とした。第2因子は、「4. この授業中にかかってきた着信には出る」「7. 着信があった場合、電話には出ずに授業後にはかけなおす(逆転項目)」[3. この授業中に通話をする]「6. 着信があった場合、電話に出ながら退室する」の4項目で、「通話」因子とした。第3因子は「13. 先生に見えないように携帯電話を使用する」

表2 授業中の携帯電話の迷惑行動尺度の因子分析結果（プロマックス回転後の因子負荷量）

	I	II	III	IV	V	VI	VII
10. マナーモードのバイブを鳴らす	.975	.005	.076	-.118	.062	.048	.036
2. この授業中はサイレントマナーモードにする（音もバイブも鳴らない状態）	-.883	.008	.235	.128	.050	.070	.031
11. 机の上でマナーモードのバイブを鳴らす	.738	-.072	.007	.324	.081	-.022	-.070
1. この授業中はマナーモードにする（音は鳴らない、バイブは鳴る状態）	.627	-.003	.049	-.066	-.080	.017	.042
4. この授業中にかかってきた着信には出る	-.039	.893	-.024	-.091	.121	.046	-.065
7. 着信があった場合、電話には出ずに授業後にかけなおす	.004	-.513	.045	.037	.203	-.072	.060
3. この授業中に通話をする	-.113	.463	-.211	.068	.281	-.159	-.017
6. 着信があった場合、電話に出ながら退室する	.190	.430	.086	-.056	.178	.092	.132
13. 先生に見えないように携帯電話を使用する	-.031	-.021	.915	-.101	-.008	-.076	-.060
14. 周囲の人に見えないように携帯電話を使用する	-.040	-.222	.669	.014	.262	.086	.110
5. この授業中に通話する場合、教室から出る	-.004	.349	.351	-.077	-.036	.154	.030
16. 携帯電話内のゲームで友達と騒ぐ	-.112	-.170	-.149	.838	.105	.121	-.060
15. 授業中に携帯電話内のゲームで遊ぶ	.035	.145	.113	.402	-.104	-.049	-.026
20. ずっと携帯電話をいじっている	.076	.215	.075	.347	-.039	-.078	.164
12. 授業中は机の上に携帯を置いたまましておく	-.042	.218	.213	.317	-.173	-.098	.099
8. この授業中に着信音を鳴らす	-.063	.060	.087	-.037	.789	-.106	-.064
9. この授業中に音を鳴らす（アラーム音など着信音以外）	.140	.035	.068	.178	.406	.075	-.029
18. 携帯電話の電源を切っておく	.014	.095	.081	.087	-.096	.829	-.151
19. 授業中は緊急時以外携帯電話を使用しないようにする	-.078	-.019	-.302	.023	.055	.413	.253
17. 携帯電話を時計代わりとして使用する	.010	-.057	.015	-.038	-.078	-.081	.837
固有値	3.892	2.110	1.192	0.993	0.721	0.672	0.543
累積寄与率	19.459	30.009	35.969	40.933	44.537	47.899	50.612
因子間相関							
I. バイブ鳴動		.474	.125	.336	.125	-.338	-.084
II. 通話			.301	.458	-.019	-.358	.152
III. 隠れて使用				.531	-.095	-.283	.304
IV. ゲーム遊び					-.009	-.255	.229
V. 着信音鳴動						.285	.050
VI. 電源オフ							.001
VII. 時計代わり							

「14. 周囲の人に見えないように携帯電話を使用する」の2項目で「隠れて使用」因子とした。第4因子は、「16. 携帯電話内のゲームで友達と騒ぐ」「15. 授業中に携帯電話内のゲームで遊ぶ」の2項目で、「ゲーム遊び」因子とした。第5因子は、「8. この授業中に着信音を鳴らす」「9. この授業中に音を鳴らす（アラーム音など着信音以外）」の2項目で「着信音鳴動」因子とした。第6因子は、「18. 携帯電話の電源を切っておく」「19. 授業中は緊急時以外携帯電話を使用しないようにする」の2項目で、「電源オフ」とした。第7因子は、「17. 携帯電話を時計代わりとして使用する」の1項目のみで、「時計代わり」因子とした。各因子を構成する項目（因子負荷量.40以上のもの）の平均値を以下の分析に用いた。なお、同20項目を用いて迷惑認知の評定も行ったが、迷惑行動の程度と対応さ

せやすいように、そのまま同じ因子で迷惑認知得点も算出した。

3. 公的自己意識が授業中の迷惑行動および認知に及ぼす影響

次に迷惑行動の程度および迷惑認知の各因子得点を従属変数、公的自己意識を独立変数とする1要因分散分析を行った（表3）。公的自己意識は、平均値（54.95）を基に高群と低群に分けた。迷惑行動の程度については、公的自己意識の高群が低群よりも、「隠れて使用（ $F(1, 103) = 4.06, p < .05$ ）」「時計代わりの使用（ $F(1, 103) = 3.27, p < .10$ ）」の得点が高かった。迷惑認知については、公的自己意識の高群が低群よりも、「バイブ鳴動（ $F(1, 103) = 6.76, p < .05$ ）」「通話（ $F(1, 103) = 6.30, p < .05$ ）」「着信音鳴動（ $F(1, 103) = 3.21, p < .10$ ）」の得点が高かった。また「電源オフ（ $F(1, 103)$ ）

表 3 公的自己意識群別の迷惑行動の程度および迷惑認知の平均値・SD・F 値

	迷惑行動の程度 (4段階)			迷惑認知 (7段階)			
	公的自己意識 低群	公的自己意識 高群	F 値	公的自己意識 低群	公的自己意識 高群	F 値	
バイブ鳴動因子	2.00 (0.84)	2.06 (0.90)	0.11	4.73 (1.01)	5.26 (1.04)	6.76 *	
通 話 因 子	1.45 (0.46)	1.41 (0.41)	0.21	5.68 (1.04)	6.10 (0.69)	6.30 *	
隠れて使用因子	2.52 (0.66)	2.80 (0.70)	4.06 *	2.74 (1.80)	2.55 (1.65)	0.31	
ゲーム遊び因子	1.57 (0.60)	1.69 (0.59)	1.06	4.30 (1.44)	4.41 (1.39)	0.17	
着信音鳴動因子	1.17 (0.39)	1.23 (0.36)	0.64	5.45 (1.53)	5.95 (1.30)	3.21 +	
電源オフ因子	1.76 (0.60)	1.73 (0.64)	0.07	2.14 (1.54)	1.58 (1.06)	4.77 *	
時計代わり因子	2.98 (0.90)	3.28 (0.80)	3.27 +	2.23 (1.60)	1.85 (1.34)	1.70	
	※ () は SD					+p<.10	*p<.05

表 4 公的自己意識高低群別の迷惑行動と迷惑認知の相関

	バイブ鳴動因子	通話因子	隠れて使用因子	ゲーム遊び因子	着信音鳴動因子	電源オフ因子	時計代わり因子
公的自己意識低群	-.45 **	-.59 ***	.12	-.29 +	-.05	.07	-.11
公的自己意識高群	-.53 ***	-.31 *	-.10	-.28 *	-.25 +	.17	-.52 ***
	+p<.10 **p<.05 ***p<.01 ****p<.001						

=4.77, $p < .05$)”の得点は、高群の方が低群よりも低く、迷惑とっていないようである。

4. 公的自己意識群別の授業中の迷惑行動と迷惑認知との相関

授業中の迷惑行動の程度と迷惑認知との関係について公的自己意識の群別にピアソンの積率相関係数を算出した(表4)。公的自己意識低群では、バイブ鳴動因子($r = -.45$, $p < .01$)、通話因子($r = -.59$, $p < .001$)、ゲーム遊び因子($r = -.29$, $p < .15$)で有意な負の相関が見られた。公的自己意識高群では、バイブ鳴動因子($r = -.53$, $p < .001$)、通話因子($r = -.31$, $p < .05$)、ゲーム遊び因子($r = -.28$, $p < .05$)の他、着信音鳴動因子($r = -.25$, $p < .10$)と時計代わり因子($r = -.52$, $p < .001$)でも有意な負の相関が見られた。

IV. 考 察

本研究の対象となった大学生の全員が携帯電話を所有しており、日常的に携帯電話を使

用しており、その中でもメール機能やインターネットが主な使用用途となっていた。

授業中の携帯電話使用に関して「迷惑だと思うこと」「気をつけていること」を集約したところ、「バイブ鳴動」「通話」「隠れて使用」「ゲーム遊び」「着信音鳴動」「電源オフ」「時計代わりの使用」といった7つの因子が見いだされており、多様な側面から検討することの必要性があるといえよう。

大学生の授業中の携帯電話使用に関する迷惑行動を見ると、大っぴらな使用は控えていることが窺える。使用実態の結果と因子分析の結果から推測すると、「メール」や「インターネット」などの機能は、「隠れて使用」していると思われる。本研究の調査対象者の中では、一定の使用に関するマナー規範が持たれていたといえよう。しかし完全に電源をオフにすることは少なく、特に公的自己意識の高い者は、周囲の人の目を気にしつつ、時計代わりの使用や隠れての使用をしているようである。迷惑認知に関しては、着信時の音や振動、話し声など騒音となるような使用につい

ては迷惑であると感じやすいようである。興味深いのは、公的自己意識の高い者は低い者よりも騒音がでる使用は迷惑だと感じやすいのに、実際の自分の行動は高低群間で差異は見られていない。隠れての使用については迷惑度をそれほど高く認知していないが、そのような行動は、むしろ公的自己意識が高い者の方が行っている。これらのことから「公的自己意識の高い者は低い者よりも授業中の携帯電話に関わる迷惑行為を抑制するだろう」という仮説は支持されたとはいえないだろう。公的自己意識の高い人は、周囲の様子を窺い、迷惑をかけない範囲で最大限、携帯電話を使用するといえよう。

公的自己意識群別の授業中の迷惑行動と迷惑認知との相関の結果から、公的自己意識の程度に関わらず、全体的に音や声などについては迷惑であると感じるほど、自分自身もその行為を控えるよう注意していることが窺える。公的自己意識の高い者のみに相関が見られたのは「着信音鳴動」と「時計代わり」であった。他者からの反応に敏感なために、予期せぬ着信音で注目を集めてしまうことを避けようとしたり、周囲の様子を伺い迷惑にならないと判断すると安心して時計代わりに使用したりするのであろう。

授業中の携帯電話使用に関わる迷惑行為に影響する要因については今後の研究でさらに検討していく必要がある。まず、周囲の人との関係性の要因が挙げられよう。谷（2006）の研究では、周囲にいる人の親密度を要因として取り挙げており、一部の迷惑行為について、見知らぬ他者よりも身近な他者との間に生じる迷惑感度は低いことが分かった。教室では、仲の良い友人と近くに座ることも多々あり、迷惑行為に無頓着になってしまうかもしれない。また、周囲の迷惑行為をしている人数の要因も挙げられる。本研究では、周囲にいる人がどのような行動をとっているのかまでそれほど細かくは記述していなかった。も

し周囲に迷惑行為をしている人がいれば、それも多数であれば、「自分が行っても目立たないし自分だけの責任とならない」と考え、迷惑行為をしやすくなるかもしれない。

付記：本研究の実施にあたり、新見真由氏の協力を得ました。記して感謝いたします。

本研究の一部は、日本心理学会第77回大会で発表された。

[引用文献]

- Campbell, S.W. (2006). Perceptions of mobile phones in college classrooms: ringing, cheating, and classroom policies. *Communication Education*, 55(3), 280-294.
- 出口拓彦 (2004). 社会的迷惑行為に対する認知と頻度の関連—公的・私的自意識および社会・個人志向性に着目して— 藤女子大学紀要, 42(2), 59-64.
- Fenigstein, A. (1979). Self-consciousness, self-attention, and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 75-86.
- Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A.H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- 三上俊治 (2001). 携帯電話のマナーにみる公私のゆらぎ 現代のエスプリ, 405, 96-105.
- 森久美子 (2009). 迷惑の生成と受容過程—列車内での携帯電話マナーに関する意識の変遷から— 吉田俊和・斎藤和志・北折充隆 (編) 社会的迷惑の心理学 ナカニシヤ出版.
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度 (Self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- 谷芳恵 (2006). 乗車場面における非社会的行動—青年の迷惑感の認知を中心に— 神戸大学発達科学部研究紀要, 14(2), 141-147.
- 谷芳恵 (2007). 乗車場面における迷惑行為と他者の迷惑認知の関連—公的・私的自意識および状況による調整効果を中心に— 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 454.
- 谷芳恵 (2010). 公共場面における迷惑行為に対する罪悪感：共感性、公的自己意識、私的自意識との関連から 神戸大学大学院人間発

達環境学科研究科研究紀要, 3(2), 21-26.

Tindell, D. & Bohlander, R. (2012). The use and abuse of cell phones and text messaging in the classroom: A survey of college students. *College Teaching*, 60,1-9.

渡邊典子・久保田美雪・石崎トモイ・小柳恭子 (2008). 中・高・大学生における携帯電話の使用状況と生活環境への影響に関する調査
新潟青陵大学紀要, 8,31-40.

[Abstract]

The Effects of Public Self-Consciousness on Cell Phone Use in the Classroom

Yoshimasa KURIBAYASHI

This study examined the effects of public self-consciousness on cell phone use in the classroom. A total of 108 university students were asked about (a) their cell phone use in the classroom, (b) the extent of annoyance when others used cell phones in the class, and (c) the public self-consciousness scale. Seven types of annoying cell phone use in the classroom were found by factor analysis: vibration, phone conversation, stealthy use, gameplay, ringing, switch-off, and substitution for clock. Persons with high public self-consciousness reported stealthy use more than those who were low. High public self-consciousness students estimated that vibration, phone conversation and ringing were annoying behaviors more than those with low public self-consciousness. Publicly self-conscious persons are highly sensitive to reactions of others, so they avoid the annoying cell-phone use openly but try to use cell phones in secret.

